

「ながめ」から見た『和泉式部日記』

——『蜻蛉日記』と比較して——

名古屋 洋子

はじめに

平安期の女流日記文学は「ながめ」の文学と言われることがあ
る。『和泉式部日記』も作品中に「ながめ」という語を二十九例ふ
くみ、その例外ではない。

夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほど
に、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築
土の上の草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あは
れとながむるほどに、(85)

という冒頭からして「ながめ」という語が用いられている。それは
読者に、世間から隔離された物静かで控え目な女、当時とすればこ
く一般的な女を思い描かせる。

くろかみのみだれもしらずうちふせばまづかきやりし人ぞ戀し
き

言うまでもなく和泉式部の代表的な歌である。しかしここには「な
がめ」の女の姿はない。あるのは愛や性への執着心からくる激しさ

である。このように『和泉式部日記』と歌人としての和泉式部の間
には大きな隔りがあると思われる。この隔りは何を意味するのであ
ろうか。その点を明らかにするため、「ながめ」一語に注目して
『和泉式部日記』を読むことにしよう。なお比較の対象として、同
時代の女流日記で「ながめ」の語が三十七例みえる『蜻蛉日記』を
選んだ。

一

日記の中の「ながめ」を追っていくと、それが用いられている文
節の直後に句点のつくことがまれであるのに気づく。すなわちそれ
は、「ながめ」が文末に来る場合が少ない、ということの意味して
いる。次の表は「ながめ」がその文のどこに位置しているかを調
べ、まとめたものである。

表1から、どちらの日記においても、「ながめ」が文末に来る場
合はきわめてまれで通常は文の途中に入っている、ということがわ
かる。さらに考察を深めると、「ながめ」という語はそれに続く他

〔表Ⅰ〕

和泉式部日記	蜻蛉日記	作品	
		項目	
1	2	a	文末の「ながめ」
1	1	b	文の途中の「ながめ」
2	3	小計	
3	8	ながむるに	
3	7	ながむるに	
1	5	ながむるに	
6	5	その他	
13	25	小計	
15	28	総計	

a II 明らかに文末の「ながめ」とみなされるもの。

b II 下に他の動詞を伴ってはいるがそれは補助的なもので、「ながめ」がその文の最終の動作とみなされるもの。

㊦() ここでは歌の「ながめ」は除外する。

の動作を引き出して強調する役目を果たしているのではないかと予測できるのである。だとするとその動作の内容が問題であるが、それに関しては後述することにする。

二

次に、前段とは多少観点を換え、「ながめ」本来の持つ意味を踏まえて、「ながめ」る対象の有無を調べてみよう。

表Ⅱ、表Ⅲは、『蜻蛉日記』の「ながめ」には対象のないものの方が多いが、『和泉式部日記』では対象のあるものとなないものほとんど同じ数見られ、その対象も具体的に指摘できる場合が多い、

〔表Ⅱ〕

B	A			項目	作品
	c	b	a		
26	2	5	4	数	蜻蛉日記
	11				
70.3	5.4	13.5	10.8	%	日記
	29.7				

A、対象のある「ながめ」

㊦対象が明確にわかる場合

㊧「ながめ」の前に対象とみなされる語がある場合

㊨共存する動詞「見る（およびその複合語）」の対象とみなされる語がある場合

B、対象のない「ながめ」

〔表Ⅲ〕

B	A			項目	作品
	c	b	a		
14	1	4	10	数	和泉式部日記
	15				
48.3	3.4	13.8	34.5	%	日記
	51.7				

ということを示している。そこで今度は具体的な対象とはいかなるものかを明らかにする（表Ⅳ参照）。

両者を比較すると、『和泉式部日記』における「ながめ」の対象の範囲が非常に狭いことに気づく。さらに注目すべき点は「月」で、それは『蜻蛉日記』では一例を数えるのみだが、『和泉式部日記』となると九例にも上るのである。ここにおいて、『和泉式部日記』

『蜻蛉日記』	庭の草木(三例)、人の帰る様子(二例)、月(二例)、雪(一例)、部屋の中(二例)、屋根の上(二例)、山(二例)、土地(一例)
『和泉式部日記』	月(九例)、空(五例)、庭の草木(一例)

の「ながめ」の裏には「ある志向」が隠されているのではないか、という疑問を抱かされる。よって以下はその所を念頭に置き、調査を進める。

先に明記したように、「ながめ」の対象として最も多いものは、『蜻蛉日記』では「庭の草木」、『和泉式部日記』では「月」である。そこでそれぞれ該当する箇所を二、三抜き出してみよう。まず『蜻蛉日記』から。

。つくろはせし草なども、わづらひしよりはじめて、うち捨てたりければ、生ひこりていろいろに咲き乱れたり。(中略) われはただつれづれとながめをのみして、(169)

。この荒れたる宿の蓬よりもしげげなりと、思ひながむるに、(183) 作者は「庭の草木」が持つその荒寥とした風情に自らの心境をオーバースタップさせて「ながめ」している。一方、『和泉式部日記』の場合はどうであろう。

。一夜見し月ぞと思へばながむれど(181)

。その夜の月のいみじう明かくすみて、ここにもかしこにもながめ明かして、(123)

。見るや君さ夜うちふけて山の端にくまなくすめる秋の夜の月

うちながめられて、(126)

このように女が月を「ながめ」る時、その向うにはいつも宮がいて、彼もその月を「ながめ」ている。明るい月の光を前にしての、しかもその背後には常に宮の姿がある女の「ながめ」と、荒れ果てた庭を前にしての『蜻蛉日記』の作者の「ながめ」、やはり両者の相違は大きいようである。

三

「一」、「二」での比較は、表面的で狭い部分のそれに過ぎない。従ってここでは内容の面を十分考慮し「ながめ」の前後に重点を置いて、その際の状態、状態に関して両日記を比べたい。

『蜻蛉日記』に、

われはただつれづれとながめをのみして、「ひとむら薄虫の音の」とのみぞいはる。

手ふれねど花はさかりになりけりとどめおきける露にかかりて(169)

とある。母の死という不幸に直面し、母と共に手入れをさせた前栽を前に茫然と「ながめをのみして」いる作者。だが寂しさは募るばかりである。その寂しさを彼女は古歌を口ずさむことによって、あるいは独詠することによって紛らわそうとしている。次は兼家の訪れが途絶えているのを嘆き、「ながめ」している場面である。

心細うてながむるほどに、出でし日使ひし油坏の水は、さながらありけり。上に塵ひてあり。(183)

そしてここでも

絶えぬるか影だにあらば問ふべきをかたみの水は水草ぬにけり
という独詠歌を詠んでゐる。そこで私は「ながめ」と独詠歌、とい
う観点から本文を追つてみた。その結果、作者の「ながめ」が独詠
歌に結びつく箇所は先に掲げた以外では次の六箇所、すなわち計八
例にも及ぶことがわかつたのである。

。つくづくとながむるに、

↓「ふる雪に……」 (220)

。ものしおぼえねば、ながめのみぞせらるる。

↓「鶯も……」 (225)

。それまして思ひかけられぬと、ながめ暮らさる。

↓「思ひせく……」 (248)

。夜中過ぐるまでながむる、

↓「うへしたと……」 (291)

。遠山をながめやれば、

↓「袖ひつる……」 (297)

。われはのどかにてながむれば、

↓「思ひきや……」 (355)

以上のことから、『蜻蛉日記』には

「ながめ」の独詠歌

①

という一つの型があると言へる。そしてこの①の中に、「一」で保
留にした問題の答えもただちに現われているのである。すなわち
「文の途中の『ながめ』が引き出し、強調している内容」とは、独
詠歌、言い換えると自らのほかなきを嘆く作者の姿なのである。

作者の生活とは「暮れはつるまで、ながめ暮ら」(306)すことであ
つた。しかしその「ながめ」は、何の甲斐もない「ながめ」であつ
た。ゆえにやり場のない寂寞感を、ひとりと和歌を詠むことで紛らわ
してみたのである。しかし無駄な抵抗であつた。なぜならば、そう
せざるを得ない自分の哀れさに他ならぬ作者自身が気づく結果とな
り、そのことが彼女の嘆きを一層深刻なものにしてしまったからで
ある。つまり『蜻蛉日記』においては、「ながめ」がより痛烈な
「ながめ」を呼び起こしていると言へる。作者の「ながめ」は徐々
に重大さを増し、尽きることなく続くのである。

さて、本題の『和泉式部日記』はどうであろうか。再び冒頭の部
分を引く。

築土の上の草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、あ
はれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、
たれならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なりけ
り。(85)

「夢よりもほかなき世の中を、嘆き、ぼんやりと「ながめる」女の
もとに「人のけはひ」がする。誰だろうと「ながめ」を中断する
女。姿を現わしたのは帥宮からの使いの者であつた。

雨うち降りていとつれづれなる日ごろ、女は雲間なきながめ
に、世の中をいかになりぬるならむとつきせすながめて、「す
きことする人々はあまたあれど、ただ今とはともかくも思はぬ
を。世の人はさまざまに言ふれど、身のあればこそ」と思ひ
て過ぐす。宮より「雨のつれづれはいかに」とて、(95)

五月雨が降るのに伴い女の「ながめ」も続く。だが女にそうさせる

のは五月雨ばかりではなかった。浮かれ女などとののしる「世の人」の声も原因していた。そんな折、宮から便りが贈られて来たというのである。

女は、まだ端に月ながめてゐたるほどに、人の入り来れば、簾うちおろしてゐたれば、例のたびごとに目馴れてあらぬ御姿にて、(103)

同様に、女が常とする「ながめ」の場面。ただここで先の二例と異なるのは、宮自身が女のもとへ訪れたということである。先述の二例が宮の女に対する間接的行動とするならば、ここでは宮の訪れは直接的行動と言えよう。いずれにしてもこれらのことから、『和泉式部日記』においても、ある一定の型を見出すことができそうである。しかもその型は、宮側の女への働きかけに関係すると思われるのである。引き続き本文を追い、その型の存在、および内容について検討しよう。

野分だちて雨など降るに、つねよりももの心細くてながむるに、御文あり。(112)

女がいつもより心細いので「ながめ」していると、宮から手紙が届く場面である。

例の童ばかりを御供にておはしまして、(中略)すべてこのころは、折からにや、もの心細く、つねよりもあはれにおぼえて、ながめてぞありける。(113)

先の例同様「つねよりも」心細く感じられて「ながめ」ていたであろうその時、宮の来訪があったという。また、

いみじう霧りたる空をながめつつ、明かくなりぬれば、このあ

かつき起きのほどのことどもを、ものに書きつくるほどにぞ例の御文ある。(114)

とも記されており、宮からの文の到着は女の「ながめ」と一致しているのである。それを明瞭に表わしているのは

ながめあたらむにふとやらむとおぼして、つかはず。女、ながめ出だしてゐたるにもて来たれば、(116)

という箇所である。女の「ながめ」を予測して宮が文を遣わずと、女はまさしく「ながめ」ていた。さらに次では、ふたりは同時刻に場所を異にして「ながめ」ている。その後にはやはり、女に対する宮側の動きが示されているのである。

その夜の月のいみじう明かくすみて、ここにもかしこにもながめ明かして、つとめて、例の御文つかはさむとて。(123)

以上のことから考えられることは、『和泉式部日記』には

「ながめ」⇩宮からの行動

②

という型がある、ということである。この②の型が見られるのは、すべて取り上げたが計八例。一方、地の文の「ながめ」で女自身の状態を表わすものは十二例。(95べ4「ながめ」と同5「ながめて」、116べ8「ながめあたらむ」と同9「ながめ出だして」は各々同時点のものともなし、共に合わせて一例とする。) なんと十二例中八例までが②に当てはまるのである(表V参照)。この②と先述の①、さらに表IVの各々の割合を比べると、兩日記間の相違がよくわかる。また、「文の途中の『ながめ』によって引き出され、強調されている内容とは何か」という「一」での問題点も、ここにおいて解

決する。すなわちそれは、④に見える、女に対する「宮からの行動」なのである。

〔表V〕

項 目	作品	地の文における本 人の「ながめ」	男性側の行動につ ながる「ながめ」
蜻蛉日記	26	(a)	(b)
和泉式部日記	12	8	(b)/a
		66.7%	11.5%

表Vを見てもわかるように『蜻蛉日記』では、兼家の行動を呼ぶ作者の「ながめ」はわずか三例である。それを以下に示し、『和泉式部日記』と比較する。

①雨いたく降りて、ながむるに、「いとあやししく心細きところになむ」などもあるべし、返りごとに、(207)

②いみじくこちまさりて、ながめ暮らすほどに、文あり。(233)

(289)

③例の見送りてながめ出だしたるほどに、(中略)、来る人あり。

①で作者は兼家の手紙を受け取る。だが「心細きところになむ」からすぐに「返りごと」と続いてしまう。要するに当然あつてしかるべき相手方の贈歌がそこにはなく、直接作者の不安な心情を訴える歌へと続くのである。その点、『和泉式部日記』はどうか。

。雲間なきながめに(95)

。つきせずながめて(95)

。心細くながむるに(112)

。霧りたる空をながめつつ(114)

。ながめむたらむに(116)

。ながめ明かして(123)

以上の六例が宮の文を授かるに至る女の「ながめ」であるが、そのすべてにおいて宮からの贈歌ははつきりと取められている。『蜻蛉日記』が自己の表出に重きを置いているのに対し、『和泉式部日記』は決して宮を尊重する態度を崩すことがないのである。

次に取り上げたいのは②・③における作者の態度である。②では手紙を、③では来訪を受けているのにもかかわらず、表面に出ているのは作者の不満や怒りである。兼家に対して素直になれない作者である。一方『和泉式部日記』では「折を過ぐしたまはぬををかしと思ふ」(95)、「日ごろの罪もゆるしきこえぬべし」(112)、「げに、かれよりまづのたまひけるなめりと見るもをかし」(124)という具合であり、女は常に素直な態度で宮に接している。

今度は『和泉式部日記』の、女の「ながめ」が「宮の行動」を引き起こさない場合、いわば例外について考えてみよう。まずそれらを列挙する。

(1)なほひとりながめあたるほどに、はかなくて明けぬ。またの夜おはしましたりけるも、こなたには聞かず。(101)

(2)「うらやましくも」などながめらるれば、宮に聞こゆ。(103)

(3)宮の御文なりけり。思ひがけぬほどなるを、(中略)うちながめられて、つねよりもあはれにおほゆ。(125)

(4)ただうちながめてのみ明かし暮らす。(中略)心細くみゆれば、

例の聞こゆ。(137)

はじめに(1)について。ここは「またの夜」とあるように、「ながめ」から宮の訪れまでに時間的空白があるため、一応例外とする。しかしすぐに「またの夜」と続きその間のことは一切触れておらず、以下はその夜の話題である。あくまでもここでの重点は「おはしましたりける」に置かれているのである。よって②に属する要素を十分に備えている箇所と言える。次に(3)についてであるが、この場合は「宮の御文」が先でその後にながめ「ながめ」ている。すなわち②と逆の流れがここに存在する。残る(2)・(4)に共通して言えることは、両者とも「ながめ」の状態から宮に歌を贈るという行動に移る、ということである。女は『蜻蛉日記』の作者のように、自己のやるせなさをひたすら歌に託すという態度はとらなかつたのである。彼女が物憂い乱れた感情を自分の内で沈めようとしているのに対し、女はその解決策を宮に求めている。いかなれば、女の「ながめ」は絶えず宮に向っているのである。「ながめ」ていても宮からは何の音沙汰もない、ならばこちらからというように、常に宮との距離をちぢめようとする努力すらうかがある。(4)における「聞こゆ」を「例の」と断っていることがその証拠である。

以上、『蜻蛉日記』と比較しつつさまざまな角度から、「ながめ」と「宮の行動」との結びつきについて検討してきた。そこでそれらを総括して考えられることは、『和泉式部日記』における女の「ながめ」には宮と同じ世界に立とうとする志向があったのではないか、ということである。「二」で「ある志向」と提示したのはこのことだったのである。女の「ながめ」が宮の行動を誘うに至るの

は、その志向によるものであろう。また、「ながめ」には具体的対象があり、その多くが月でしかもその月は宮といっしょに見る月と限定する場合が多いのも、すべてその志向によると思われる。では次の段で志向の存在を裏付ける事実を述べることにしよう。

四

周知のように、この作品は女を極力控え目に描いている。しかしその中で、まれではあるが表面化する女の積極性というものを無視することはできない。従って、最初にその希少価値とも言える女の積極的な姿勢を取り上げる。

五月五日の頃、川の水が増したというところで、宮は女に歌を贈る。女はそれに対する返歌に「かひなくなむ」(97)ということばを添えている。これなどは積極的姿勢と言えるであろう。歌ばかりでは物足りません、どうか宮様御自身私のもとへ、といった女の誘いをそこに感じる。同様の誘いは、

こころみにおのが心もこころみむいざ都へと来てさそひみよ
(111)

という歌からもうかがえる。また、

いとまなみ君来まさずはわれ行かむふみつくらむ道を知らば
や(140)

あるいは

われさらば進みてゆかむ君はただ法のむしろにひろむばかりぞ
(144)

とも詠んでいる。宮を誘ったかと思うと今度は、私の方からうかが

いましょう、という。宮に対して積極的に働きかける女である。

次は「女からの贈歌」について。これは「基本型をさかさにした」ものであるから、調べる余地は十分あると思われる。単に贈歌という場合、返歌以外の歌をそれにつけて贈ったり、同じ場所にて取り交したりするものも含まれよう。しかしここで論ずるのはそれら以外、すなわちふたりは完全に場所を異にしており、歌のやりとりが女から始まっていてそれを手渡す使者も女から送っている、そういう場合の贈歌である。以上の条件を備えた贈歌は『和泉式部日記』に十首、『蜻蛉日記』に三首見られる。そしてその数字を作品中の本人の歌の総数と比べると、表Ⅵのようになる。

〔表Ⅵ〕

項目	作品	贈歌数	歌の総数	贈歌の割合(%)
和泉式部日記	10	76	13.2	
蜻蛉日記	3	120	2.5	

こうしてみると、いかに『和泉式部日記』で「女からの贈歌」が多いかがよくわかる。そしてこのこともやはり女の積極性を強く打ち出す結果となっているのである。

志向の存在を裏付けるもう一つのポイントとして「われ」をとり上げよう。

何時雨かもなにに濡れたるたもとぞと定めてかねてぞわれもながむる(130)

この「ながめ」の歌に詠み込まれている「われも」ということは、例の志向を表わしていると思う。なぜならば「われも」とは自分以外の誰かを意識した表現であり、この場合の誰かとは宮以外には考えられないからである。さらに「われ」(女主体の「われ」)について検討する。

(イ)いかにとはわれこそ思へ朝な朝な鳴き聞かせつる鳥のつらさは(101)

(ロ)われならむ人もさぞ見む長月の有明の月にしかじあはれは(116)

(ハ)君をおきていづち行くらむわれだにも憂き世の中にしひてこそふれ(118)

(ニ)なにごともただわれよりほかのとのみ思ひたまへつつ、(122)

(ホ)今の間に君来まさなむ恋しとて名もあるものをわれ行かむやは(134)

(ヘ)恨むらむ心は絶ゆなかりなく頼む君をぞわれもうたがふ(135)

(ト)君は君われはわれともへだてねば心々にあらむものかは(138)

(チ)いとまなみ君来まさずはわれ行かむふみつくるらむ道を知らばや(140)

(リ)さゆる夜のかずかく鳴はわれなれやいく朝霜をおきて見つらむ

(140)

(ロ)われさらば進みてゆかむ君はただ法のむしろにひろむばかりぞ

(144)

(ハ)呉竹の世々のふることおもほゆる昔がたりはわれのみやせむ

(145)

女主体の「われ」は、(イ)～(ロ)計十二例。そしてそれらはいずれも

宮を意識しての「われ」である。例の「われならむ人」は、岩瀬法雲氏が述べられるように、「女以外のすべての人」であつて決して

「宮一人」を指しているのではないだろう。しかしその中で占める比重が最も大きかつた人物はやはり宮である。と言うのは、その後続く「門をうちたたかする人」(116)も「明かす人」(116)も明らかに宮を指し示す表現になっているからである。また(四)、(五)、(六)、(七)、(八)では「われ」に「君」を呼応させており、女の中で常に「君とわれ、ふたり」という意識が働いていることがわかる。このように女が「われ」と言う時、それは単なる「われ」ではなく、宮という人がいて初めて意味をなす「われ」なのである。

『蜻蛉日記』では誰を意識して「われ」を用いているのであろうか。それは時と場合によつてさまざまであり、特に兼家だけを意識して、ということはないようである。それどころかこの作品の「われ」には「われのみ」という感覚が強いのである。

人は、童、大人ともいはず、「雛やらふ雛やらふ」と騒ぎののしるを、われのみのどかにて見聞けば、(300)

という調子である。『和泉式部日記』の「われ」には「君とわれ、ふたり」という意識が隠されていた。が、こちらの「われ」は、自分と自分を取り巻く環境とのギャップを強調しているに過ぎないのである。

ここでは女の積極的な姿勢と、「われ」の持つ意味をまとめた。これらのことから、女の「ながめ」には宮と同じ世界に立とうとする志向があつた、ということがより明確になつたと思う。

五

「ながめ」を通して『蜻蛉日記』を見た時、そこには世のはかなさを嘆く作者がいた。同様の観点から『和泉式部日記』を見た時、そこには宮と同じ世界に立とうとする女の姿がみとめられた。『蜻蛉日記』が「ひとりぼっちの嘆き」にとどまっているのに対し、『和泉式部日記』は終始「ふたりの世界」を追い求めているのである。この事実は取りも直さず、『和泉式部日記』の特質を表わしていると言える。

ところで、私はこの論文の中で繰り返し「宮と同じ世界に立とうとする志向」と述べてきた。常に「立つ」「立った」ではなく「立とうとする」としてきた。なぜそうしたかという点、女に「立とうとする」志向があつても、実際には「立てなかつた」のではないか、と思うからである。もし「立てた」のならば、

あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなしことに、世の中をなぐさめてあるも、うち思へばあさましう。(109)

とか、

例のつれづれなぐさめて過ぐすぞ、いとほかなきや。(144)

などとは言わないはずである。ではなぜ「立てなかつた」ののだろうか。それは宮のせいでも世間のせいでもない。他ならぬ女自身が原因しているのである。先に上げた二例を取ってみてもわかるように、女の中には常に、彼女を冷静に、かつ鋭く見つめる眼を持つた、もうひとりの女がいたのである。もうひとりの女がその眼で絶えず、宮との愛を貫こうとする彼女を客観的に見つめ、きびしい視

線を投げかけていたのである。

おわりに

「はじめに」では私は、歌人としての式部と日記との間には隔りがあると述べた。しかしその考え方は誤っていたと言わなければならぬ。なぜならば、恋愛に対する女の積極性が、そして女を見つめる「もうひとりの女」の存在が、日記の中にもみとめられたからである。これらは共に「くろかみの」の歌、さらには式部の歌の特色に通ずるのである。

懸命の努力もむなしく、女はついに宮と同じ世界に立てなかった。結局、女の「ながめ」も、たったひとりの「ながめ」に過ぎなかったのである。ここにおいて『蜻蛉日記』における「ながめ」と一致したわけである。しかし問題なのはその結果ではない。そこに至るまでの過程が重要なのである。今まで述べてきたことから明らかのように、両者のその過程はまるで異なっている。繰り返すと、『蜻蛉日記』においては、女性の方から男性に近づこうとする意志の表出は、まったくと言ってよい程見られなかった。むしろ男性側が自分に近づいて来るのを待っていた、とする方が妥当かもしれない。それにひきかえ『和泉式部日記』においては、常に女性が男性に近づこうと、男性と同じ世界に立とうと必死になっていた。この過程こそが肝心なのである。終局的には裏切られて近づいて来てはくれなかつたとしても、あるいは同じ世界に立てなかつたとしても、それらはいくまで結果でしかないのである。だから『和泉式部日記』は、「ながめ」の甲斐もなく宮と同じ世界に立つことのでき

なかつた女のはかなさを主題としているのではない。それが我々に訴えようとしているのは、女の、宮と同じ世界——男と女の愛の世界——に立とうとする姿勢そのものなのである。

〈注〉

- 1 本論文の引用本文は、『日本古典文学全集』（小学館刊）による。引用本文末尾の数字はページ数を表わす。
- 2 円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記・増補版』（昭和五十三年五月三十日、至文堂刊）、342頁。
- 3 『文学・語学』（第七十八号、一九七七年六月）掲載の「和泉式部日記の主題——『手習文』を中心に——」、88頁。

〈付記〉

本論は、昭和五十五年卒業論文「ながめ」から見た『和泉式部日記』——『蜻蛉日記』と比較して——のうちの、第二章「『蜻蛉日記』との比較」を中心にまとめたものである。